
スライムの生態に憑依した人物の物語

FORCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スライムの生態に憑依した人物の物語

【Nコード】

N6558S

【作者名】

FORCE

【あらすじ】

ある人がドラゴンクエストのスライムに憑依してしまいました。

スライムに憑依した男の物語A（前書き）

『とある男』がドラゴンクエストのスライムに憑依してしまいました。

さてここに書かれてるのは誰の物語やら……

スライムに憑依した男の物語A

ある日、目が覚めたらドラゴンクエストのスライムになっていた。

湖に姿を写しながら、これからどうするかを考える。

ひとまずは生き延びることだ。

スライムが何を食うのか知らなかったので、ひとまず草を食ってみた。

中々おいしかった。

しばらく草を食っていたら、急に体が熱くなった。

体を冷やす為に湖の水を飲んだ。

それでも体の熱さは止まらなかった。

思いつきり目を閉じる。

「うわっ！」

と後ろから声が聞こえた。

後ろを振り向くと、もう一匹スライムがいた。

「お前……何時からそこにいた？」

「何時からって……水を飲んでたら急にお前が現れて……。」「
「は？何を言ってるんだ？？」」

話しているうちに気がついた。スライムの体が分離したら『俺』も二人になるって。

俺達はとりあえず一緒に暮らすことにした。

そして数日が立った。

『俺達』の住んでいる所に別のモンスターが攻めてきた。

そのモンスターの一匹に食われて、『俺』は死んだ。

スライムに憑依した男の物語B

ある日、目が覚めたらドラゴンクエストのスライムになっていた。

湖に姿を写しながら、これからどうするかを考える。

ひとまずは生き延びることだ。

スライムが何を食うのか知らなかったので、ひとまず草を食べてみた。

中々おいしかった。

しばらく草を食べていたら、急に体が熱くなった。

体を冷やす為に湖の水を飲んだ。

それでも体の熱さは止まらなかった。

思いっきり目を閉じる。

「うわっ！」

と後ろから声が聞こえた。

後ろを振り向くと、もう一匹スライムがいた。

「お前……何時からそこにいた？」

「何時からって……水を飲んでたら急にお前が現れて……。」「
「は？何を言ってるんだ？？」」

話しているうちに気がついた。スライムの体が分離したら『俺』も二人になるって。

俺達はとりあえず一緒に暮らすことにした。

そして数日が立った。

『俺達』の住んでいる所に別のモンスターが攻めてきた。

『俺達』の何人かは食われた。だが『俺』は生き延びた。

このままでは駄目だ。誰かがそう言った。

「強くなる！俺は強くなって生き延びてやる！！」

そう言ってそいつは、旅立って行った。

『俺』はここに残ることにした。

それから、どれだけの月日が立ったのだろう。『俺』は生まれた地

でスライムとして生きている。

目の前で『俺』が死ぬのを『俺』は無数に目にしてきた。

それでも『俺』は死にたくなかった。たとえどれほど『俺』が死んでも、『俺』だけは生き残る。

その気概で、『俺』は今生きている。

スライムに憑依した男の物語B（後書き）

トリッパーは何か立派な事をしなければいけない使命があるのでしょ
うか？

スライムに憑依した男の物語C

ある日、目が覚めたらドラゴンクエストのスライムになっていた。

湖に姿を写しながら、これからどうするかを考える。

ひとまずは生き延びることだ。

スライムが何を食うのか知らなかったので、ひとまず草を食べてみた。

中々おいしかった。

しばらく草を食べていたら、急に体が熱くなった。

体を冷やす為に湖の水を飲んだ。

それでも体の熱さは止まらなかった。

思いつきり目を閉じる。

「うわっー！」

と後ろから声が聞こえた。

後ろを振り向くと、もう一匹スライムがいた。

「お前……何時からそこにいた？」

「何時からって……水を飲んでたら急にお前が現れて……。」「
「は？何を言ってるんだ？？」

話しているうちに気がついた。スライムの体が分離したら『俺』も二人になるって。

俺達はとりあえず一緒に暮らすことにした。

そして数日が立った。

『俺達』の住んでいる所に別のモンスターが攻めてきた。

『俺達』の何人かは食われた。だが『俺』は生き延びた。

このままでは駄目だ。『俺』はそう言った。

「強くなる！俺は強くなって生き延びてやる！！」

そう言って『俺』は、旅立って行った。

強くなる為に、『俺』は分裂を繰り返しながら旅を続けた。

毒の沼地に着いた時、ゾンビにこう言われた。

「この沼の毒を吸えば強くなれるぞ。」

ひとまず試すことにした。

体のはじけて、『俺』は死んでしまった。

スライムに憑依した男の物語D

ある日、目が覚めたらドラゴンクエストのスライムになっていた。

湖に姿を写しながら、これからどうするかを考える。

ひとまずは生き延びることだ。

スライムが何を食うのか知らなかったので、ひとまず草を食べてみた。

中々おいしかった。

しばらく草を食っていたら、急に体が熱くなった。

体を冷やす為に湖の水を飲んだ。

それでも体の熱さは止まらなかった。

思いつきり目を閉じる。

「うわっー！」

と後ろから声が聞こえた。

後ろを振り向くと、もう一匹スライムがいた。

「お前……何時からそこにいた？」

「何時からって……水を飲んでたら急にお前が現れて……。」「
「は？何を言ってるんだ？？」

話しているうちに気がついた。スライムの体が分離したら『俺』も二人になるって。

俺達はとりあえず一緒に暮らすことにした。

そして数日が立った。

『俺達』の住んでいる所に別のモンスターが攻めてきた。

『俺達』の何人かは食われた。だが『俺』は生き延びた。

このままでは駄目だ。『俺』はそう言った。

「強くなる！俺は強くなって生き延びてやる！！」

そう言って『俺』は、旅立って行った。

強くなる為に、『俺』は分裂を繰り返しながら旅を続けた。

腐肉を食らううちに『俺』の体は赤くなっていた。

体も少し強くなった感じがする。

もっと強い物を食べば『俺』はもっと強くなる。

そう考えて、『俺』はおおがらすと戦うことにした。

返り討ちにあつて『俺』は死んだ。

スライムに憑依した男の物語E

ある日、目が覚めたらドラゴンクエストのスライムになっていた。

湖に姿を写しながら、これからどうするかを考える。

ひとまずは生き延びることだ。

スライムが何を食うのか知らなかったので、ひとまず草を食ってみた。

中々おいしかった。

しばらく草を食っていたら、急に体が熱くなった。

体を冷やす為に湖の水を飲んだ。

それでも体の熱さは止まらなかった。

思いっきり目を閉じる。

「うわっ！」

と後ろから声が聞こえた。

後ろを振り向くと、もう一匹スライムがいた。

「お前……何時からそこにいた？」

「何時からって……水を飲んでたら急にお前が現れて……。」「
「は？何を言ってるんだ？？」」

話しているうちに気がついた。スライムの体が分離したら『俺』も二人になるって。

俺達はとりあえず一緒に暮らすことにした。

そして数日が立った。

『俺達』の住んでいる所に別のモンスターが攻めてきた。

『俺達』の何人かは食われた。だが『俺』は生き延びた。

このままでは駄目だ。『俺』はそう言った。

「強くなる！俺は強くなって生き延びてやる！！」

そう言って『俺』は、旅立って行った。

強くなる為に、『俺』は分裂を繰り返しながら旅を続けた。

『俺』の一人の体が赤くなっていた。

どつやら腐肉を食らっているうちに赤くなったらしい。

他の物でも試せないかと思ったので色々探す。

偶然『きえさりそう』を見つけたので試してみる。

姿が誰にも確認できなくなった。結構待ったが、姿は消えたままだった。

これはこれで生き残れそうなのでよしとしよう。

俺はそう思ってゆっくりと洞窟の中に隠れることにした。

スライムに憑依した男の物語F

ある日、目が覚めたらドラゴンクエストのスライムになっていた。

湖に姿を写しながら、これからどうするかを考える。

ひとまずは生き延びることだ。

スライムが何を食うのか知らなかったので、ひとまず草を食べてみた。

中々おいしかった。

しばらく草を食っていたら、急に体が熱くなった。

体を冷やす為に湖の水を飲んだ。

それでも体の熱さは止まらなかった。

次の瞬間、俺の目の前にもう一匹のスライムが現れた。

「うわっ!!」

と声を張り上げるとそのスライムが後ろを振り向いて質問した。

「お前……何時からそこにいた？」

「何時からって……水を飲んでたら急にお前が現れて……」。

「は？何を言ってるんだ？？」

話しているうちに気がついた。スライムの体が分離したら『俺』も二人になるって。

俺達はとりあえず一緒に暮らすことにした。

そして数日が立った。

『俺達』の住んでいる所に別のモンスターが攻めてきた。

『俺達』の何人かは食われた。だが『俺』は生き延びた。

このままでは駄目だ。『俺』はそう言った。

「強くなる！俺は強くなって生き延びてやる！！」

そう言って『俺』は、旅立って行った。

強くなる為に、『俺』は分裂を繰り返しながら旅を続けた。

『俺』の一人の体が赤くなっていた。

どうやら腐肉を食らっているうちに赤くなったらしい。

他の物でも試せないかと思ったので色々探すことにした。

偶然、『へんげのつえ』を手に入れたので色々試してみた。

そうしたら、いつの間にか俺は『変化のつえ』の能力を取り込んでいた。

目の前の相手の姿と力を模す存在と『俺』はなっていたのだ。

『俺』に勝てる相手などいない。なぜなら『俺』は自由に姿も強さも変えられるからだ。

魔法が聞かなければボストロールになり力で粉碎し

肉弾戦ができなければ、きめんどうしになってメダパニで粉碎する。

山の木々を食らいつくし、海の魚と言う魚を食らいつくした。

「ふう……………」。

バラモスとやらを食らった俺は、満足そうにため息をついた。

「止める！ そんなに強くなっても意味が無いだろう！！」

気がついたら足元に無数の銀色のモンスターがいた。

「元のスライムに戻るって平和に暮らすなら良し！ 駄目ならばお前を殺す！」

馬鹿な。俺は最強なのだ。俺に勝てる存在など無い！ ルビスとやらも俺はくらってやる！

「……そうか……止めないのか。」

そいつは、足元(?)から何かを取り出した。

それに照らし出された『俺』ノカラダハキュウソクニホウカイシテ
イッタ……。

ナンデモットツヨクナロウトカンガエナカッタンドロウ？

モットツヨクモットトオクヘトベルチカラガアッタラマケナカッタ
ノニ……

アア『オレ』ハナンテバカナシダ。モシモモウヒトリノジブンニア
エタノナラコウツタエタイ

「……モットツヨクナツテクレヨ。」

スライムに憑依した男の物語F（後書き）

チートですよ。ええとてもチートでしたよ。

スライムに憑依した男の物語 G (前書き)

さてこちらではこの話が最終話。貴方はこの物語の先に何を見る？

スライムに憑依した男の物語G

ある日、目が覚めたらドラゴンクエストのスライムになっていた。

湖に姿を写しながら、これからどうするかを考える。

ひとまずは生き延びることだ。

スライムが何を食うのか知らなかったので、ひとまず草を食べてみた。

中々おいしかった。

しばらく草を食っていたら、急に体が熱くなった。

体を冷やす為に湖の水を飲んだ。

それでも体の熱さは止まらなかった。

思いつきり目を閉じる。

「うわっー！」

と後ろから声が聞こえた。

後ろを振り向くと、もう一匹スライムがいた。

「お前……何時からそこにいた？」

「何時からって……水を飲んでたら急にお前が現れて……。」「
「は？何を言ってるんだ？？」」

話しているうちに気がついた。スライムの体が分離したら『俺』も二人になるって。

俺達はとりあえず一緒に暮らすことにした。

そして数日が立った。

『俺達』の住んでいる所に別のモンスターが攻めてきた。

『俺達』の何人かは食われた。だが『俺』は生き延びた。

このままでは駄目だ。『俺』はそう言った。

「強くなる！俺は強くなって生き延びてやる！！」

そう言って『俺』は、旅立って行った。

強くなる為に、『俺』は分裂を繰り返しながら旅を続けた。

毒の沼地に着いた時、ゾンビにこう言われた。

「この沼の毒を吸えば強くなれるぞ。」

ひとまず試すことにした。

体ははじけて、『俺』はバブルスライムになっていた。

……体が変になったが、俺はバブルスライムで過ごす事にした。

しばらくしたら女の人が入っていた。なにやら大事な物を沼地に落として困っているらしい。

まあ、この沼地に適応した『俺』達なら何とかできるかもしれない。

何度か試すうちに毒の沼の底にあった鏡を手に入れた。

お礼に天界に連れて行ってもらえるらしい。

『俺』達の3/4は残るといって他の奴らが行くといったらしい。

『俺』は行くことにした。

その時、俺の体は白銀のスライムになっていた。

天界の暮らしは平穩だった。

『あれ』が現れるまでは。

『あれ』は魔王を食らった。大地の山と言う山を食らい、海の魚と

言っ魚を食らった。

『あれ』は『俺』達が止めなければならない。

『あれ』は『俺』なのだから。

偉い様は言いました。『あれ』は普通の手段では倒せないと。

只一つ倒す手段は『××××』を使うことのみ。

『俺』達は世界中を回った。数が足りなければ増え、多すぎるなら自殺する。

そんなことをしながら『俺』は例の物を見つけたのだ。

そうして『俺達』は『あれ』の前に姿を現す。

「ふう……………」

とそいつはこちらを気にするわけでもなくため息をついた。

『俺』は大声を張り上げてそいつをどなりつけた。

「止める！ そんなに強くなっても意味が無いだろう！！」

こいつを止めねば世界は破滅する。ならば、ここで止めなければ！

「元のスライムに戻るって平和に暮らすならよし！ 駄目ならばお前を殺す！」

そいつは軽くせせら笑った。自分が強いと思っ込んでいるのだろう

か？

「……………そうか……………止めないのか。」

俺は足元から大切な物……………『ラーの鏡』を取り出した。

本当の姿が映し出される。弱いスライムの姿になったかと思うとそいつは自らの体重に耐えられず急速にしぼんでいった。

幾ら変化の杖で変わったとはいえ真実を映し出す『ラーの鏡』の力は偉大だ。

「……………モットツヨクナツテクレヨ。」

最後にはそつとアイツはそう言った。誰に向かったの言葉だったのだろうか？

『俺』に向かつてか？ それともまた別な奴がいたのだろうか？

『あいつ』の気持ちは、『俺』にはさっぱりわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6558s/>

スライムの生態に憑依した人物の物語

2011年4月24日17時31分発行